

〔論文〕

教職課程における理論と実践の往還

——実習科目における学生の記述を手がかりに——

國原 幸一郎

名古屋学院大学現代社会学部

要 旨

学問知と実践知の乖離が問題視されてから久しいが、教職課程においては「学校インターンシップ」「介護等体験」「教育実習」などの実習科目を通して、実践知と座学科目の知識や理論（いわゆる学問知）を結びつけ実践的指導力を養おうとしている。近年大学では学校現場よりの実践的な内容と方法を用いて教授や指導が行われ、学問知の比重が低下しているが、実習体験が学生の意識や思考にどのような影響を与えているかを分析・考察することを通して、学問知がどう活用されているかを明らかにすることは必要で、そこから教師教育の在り方について示すこともできよう。本研究では3つの実習科目のワークシートやアンケートと履修カルテの記述内容をもとに分析する。

キーワード：介護等体験，学校インターンシップ，教育実習，理論と実践，省察

Learning theory and practice in teacher training course

Koichiro KUNIHARA

Faculty of Contemporary Social Studies

Nagoya Gakuin University

1. はじめに—問題の所在と研究目的

大学で学ぶ理論や知識（学問知）は、社会に出ると役に立たないと言われて久しい。しかし田島（2016a）は、学問知をそれぞれの学生が抱える実践的問題と結びつけることで、現場の実践知そのものを変えていく可能性があるとして述べている。具体的には、インターンシップ等の実践体験型演習を事例として、学問知と実践知の往還により、学生の成長と大学教育の進展を図る可能性があるとして指摘している。大学で学ぶ学問知と実践現場で学ぶ実践知を相互参照し、学生自身の「実践理論」を立ち上げるためには、学生自らが省察を行えるようにすることが求められ、その育成に重点を置くべきである。しかし現状は、実践体験をふまえて学生自らが省察を行うまでには至っていない。学生の中には実践体験を重視し学問知を軽視する者もみられる。その要因として実践現場での指導・助言が教員採用と強く結びついている一方、大学側の指導・支援体制が不十分であることがあげられる。

学生の成長について、田島（2016b）はヴィゴツキーの発達論にもとづき、学習者が学問知と実践知を相互に参照することにより、他世界に住む人々との言語交流を可能とすると述べている（内言と外言）。彼の主張によれば、自らの生活世界における知見を深めつつ、他の社会集団に属する人々との交流の可能性を高めていくことにより、自身の認知的成長がはかれる。学問知は個々の実践文脈における複数の実践知を接続し、それぞれの文脈を背景とする人々との相互交流を通して新たな知見を見出すためのツールであると指摘している。

教職課程において理論と実践の往還を行う場として、学校インターンシップ（希望者のみ）、

介護等体験（義務教育学校免許状取得希望者）、教育実習（全員）があげられる。

そこで本稿では、これら3つの実習科目を取り上げて、ワークシートやアンケート調査における学生の記述を比較検討し、実習科目の学びが教職課程の学びの中でどう位置づけられているかを明らかにすることを研究目的とする。

2. 学校インターンシップ

2.1 意義と課題

2015年12月の中央教育審議会「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上」において学校インターンシップの導入が言及されている。教育実習との役割分担を明確にした上で、学校インターンシップの単位を教育実習の一部に充ててよいとしている。2019年から教育職員免許法施行規則一部改正によって単位化され、「教育実習」を一部代替あるいは補充することが認められた。佐藤・伊藤（2018）は学校インターンシップと教育実習を教員養成課程におけるフィールド・スタディと位置づけている。

学校インターンシップの意義について、山本（2017）は大学で得た知識の理解を深めるとともに教師として求められる多様な価値観の理解や生徒の要求を感じ取る感性が磨かれる機会であると述べ、それまでの自分自身のあり方やものの見方を振り返ることもあげている。

しかしながら、参加する学生により、意欲や学び取ることは異なる。院田・舟生（2018）は学校インターンシップの活動が教職志望学生の意識にどのような変化を与えたかをワークシートを用いてテキスト分析を行った。その結果として参加校種により子どもとの距離感の違いが見られたことに加え、積極的に参加する学生ほ

ど経験を指導に生かすために考察し、消極的な学生ほど表面的な感想に止まっていることが示された。

長谷川（2018）は体験的な学びの意義を既存の教員文化を変えうることに見出そうとしている。しかし現実的には学校現場に自身を適用させることに学びの目的がある。やがて、いつでも、どこでも、だれにでも通用する方法を見出すことは困難で現実的でないことに学生は気づく必要がある。ショーンのいう「行為の中の省察」を対象として、実践における省察を批判的に検証する場として大学が重要な役割を果たすが、大学教員にも実践を批判する力が求められている。

学校インターンシップの実施上の課題について、橋本（2017）は教育委員会・受け入れ校・大学との連携体制の構築、大学における事前・事後指導の実施、各機関の情報交換が必要であると指摘している。山口ほか（2018）は実践的指導力を伸ばすためには大学の主体性と教員養成に関わる教員の意識、教員採用に関わる自治体との連携強化が課題であると指摘している。そういった課題への対応も必要であるが、大学においては、まず教職課程のカリキュラムにおける実習科目の位置を再確認した上で学習者の実践的学びを広い見地から客観的に捉え直すことが必要で、その研究が進められなければならない。

2.2 本学の学校インターンシップ

本学では先取りする形で教科又は教育に関する科目（大学が独自に設定する科目）として2017年度に「学校インターンシップⅠ」（2単位・2年生以上・通年）、「学校インターンシップⅡ」（2単位・3年生以上・通年）を設置し、学校インターンシップ・ボランティア運営委員

会（授業担当者は運営委員）でプログラムや進め方等を話し合い、確定していった。

授業の到達目標は以下の通りである。①実地参加を通じて教職の実際について総合的かつ実践的に理解する、②教員の児童・生徒に対する指導・支援のあり方を実践的に学ぶ、③児童・生徒の実態についての理解を深める、④実地参加の成果を発表し交流することで自己省察能力とコミュニケーション能力を高める。

授業の進め方としては、3月下旬に2・3年生向けに説明会を行い、その前半は本年度の体験者が報告し、後半は趣旨や心構え、概要について担当教員が解説した。4月中旬に面接を行い、合格者は表1のプログラムのいずれかに参加申し込みを行うとともに、大学および実施校で事前指導を受けた。学期途中で面談を数回行い、困っていることはないか、実地ノートの記載と参加状況の確認を行った。

事前指導の筆者担当分の諸注意では、学校ボランティアと学校インターンシップの類似点と相違点、基本姿勢と約束事項、子どもとの関わり方、教員との関わり方、学習支援における配慮、授業外支援における配慮、外国語活動支援などについて、藤堂（2010）と愛知県立大学生涯発達研究所・愛知県総合教育センターのpdfをもとに説明した。事後指導は参加者のパワーポイントによる発表、教員コメント、参加者同士の意見交換、報告書作成の順に進めた。

表1 学校インターンシップのプログラム

(1) なごや教職インターンシップ

運営	名古屋市教育サポートセンター
実地場所	名古屋市内の小学校、中学校、特別支援学校
活動日時	月～金曜の平日2時間以上
活動内容	学級担任補助、教科指導補助、学校行事補助

(2) トワイライトスクール・ルーム

運営	名古屋市教育スポーツ協会
実地場所	名古屋市内の小学校
活動日時	月～金曜の午後と土曜、1日2時間以上
活動内容	学びの活動の支援、子どもたちと遊ぶ

(3) 多治見市

運営	多治見市教育委員会
実地場所	多治見市内の小学校、中学校
活動日時	受講生が個別に研修校と事前に協議して決定
活動内容	授業や学習の支援、生活支援

(4) 瀬戸市

運営	瀬戸市教育委員会
実地場所	瀬戸市内の小学校、中学校
活動日時	受講生が個別に研修校と協議して決定
活動内容	教員の補助、学びの活動や部活動の支援

(5) 名古屋土曜学習いきいきサポーター

運営	名古屋市教育委員会指導室
実地場所	名古屋市内の小学校
活動日時	受講生各自の予定に合わせて調整
活動内容	土曜学習プログラムの支援と補助

2.3 活動内容と学生の自己分析

2017・2018年度の「学校インターンシップⅠ」受講生(対象は現在4年生の6名)の受講目的・動機は「経験の蓄積」「自分の成長」「適性の確認」が多く、教員採用試験に有利だからと答えた者はいなかった(表2)。地元の学校教育との違いを確かめたいという学生もいた。得意なこととして「人に教えるのが好き」と答えた者は少なかったが、コミュニケーションが得意といった者が多く、実習前に不安や緊張を抱えていた。活動場所は小学校が多く、実習時間や実習内容も個人差が大きい(表3)。取得免許にあった中学校や高等学校で体験できることが望ましいが、たとえ小学校での体験でも得られることは多いことを確認している。

表2 学校インターンシップ開始前の意識

(受講生A～Fは表3・4と一致する)

受講生	受講目的・動機	得意分野	実習前の気持ち
A	<ul style="list-style-type: none"> 自分の成長 経験の蓄積 学校現場の理解 教育実習の準備 就職に有利 適性の確認 	<ul style="list-style-type: none"> 真面目に聞く 気になったことを人に聞く 相手の話をよく聞く 	<ul style="list-style-type: none"> すごく緊張していた 不安でいっぱいだった
B	<ul style="list-style-type: none"> 不安軽減 経験の蓄積 求められる資質能力の理解 教育現場への慣れ 	<ul style="list-style-type: none"> 人と接する 	<ul style="list-style-type: none"> 笑顔とあいさつは忘れない 先生の動きに注目したい
C	<ul style="list-style-type: none"> 技術の習得 	<ul style="list-style-type: none"> 子ども達と行動する 	<ul style="list-style-type: none"> 楽しみ
D	<ul style="list-style-type: none"> 教員としての言動理解 教育現場の理解 教育の問題の理解 今後の自分への活用 適性の確認 	<ul style="list-style-type: none"> 朗らかで真面目 スキンシップができる 	<ul style="list-style-type: none"> 好奇心 不安 緊張感
E	<ul style="list-style-type: none"> 仕事の経験 自分の成長 子どもたちの接し方の理解 技術や知識の習得 	<ul style="list-style-type: none"> 人の話を聞く コミュニケーション 	<ul style="list-style-type: none"> 不安 楽しみ
F	<ul style="list-style-type: none"> 教育の実態や問題の理解 地元と名古屋の違いの理解 教育実習への活用 貴重な体験 	<ul style="list-style-type: none"> 人に物事を教えること 	<ul style="list-style-type: none"> 緊張と期待

教職課程における理論と実践の往還

表3 学校インターンシップの活動状況

受講生	実習校	実習時間	実習内容	学んだこと（アンケート調査結果）
A	小学校	52時間	<ul style="list-style-type: none"> ・土曜学習 ・行事補助 ・休み時間対応 ・実地先の講師の手伝い ・子どもたちとのふれ合い 	<ul style="list-style-type: none"> ・逐一報告し一緒に対応することが大切である ・悪いことをした子に強めに注意することが必要である ・子どもに接することの楽しさと苦勞を感じた ・自分に話題が少ない ・喧嘩の仲裁が力不足であった
B	小学校	54時間	<ul style="list-style-type: none"> ・授業参観 ・テスト中の見回り ・プールの補助 ・提出物の丸つけ ・朝校門で挨拶 ・全国大会会場準備 ・全国大会スタッフ 	特に記載なし
C	小学校	40時間	<ul style="list-style-type: none"> ・土曜学習のサポート 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもとの関わり方や対応の仕方を学べた ・大勢の子どもの対応はむずかしい ・話し方や関わり方を変えることの重要性を学んだ
D	小学校	51時間	<ul style="list-style-type: none"> ・教科指導補助 ・教室移動誘導 ・怪我対応 ・清掃手伝い ・道具の清掃 ・学級活動補助 ・パソコン補助 ・学級監視 ・宿題採点 ・図書館在庫数調べ 	<ul style="list-style-type: none"> ・貴重な体験ができた ・教員生活の大変さや子どもとの接し方に苦戦した ・コミュニケーション能力が足りていないことを痛感した ・教育に対する考えを見つめ直すことができてよかった
E	小学校	40時間	<ul style="list-style-type: none"> ・授業のサポート ・放課中の子どもたちとのふれあい 	特に記載ない
F	中学校	54時間	<ul style="list-style-type: none"> ・授業見学 ・授業補助 ・校内清掃 ・教科指導補助 	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校の実態を知ることができた ・自分が中学生だったところと比較できた ・雰囲気や生徒の態度が教科によって違って興味深かった ・臨機応変に対応する能力が求められたがうまく対応できた

表4 学校インターンシップの成果と課題

受講生	成果	課題	どう生かすか
A	<ul style="list-style-type: none"> ・迅速に相談できる ・一人で勝手に判断せず行動する ・注意することができる ・怒るときに躊躇することが減った ・人を傷つけることにつながることをした子を強めに注意できた ・知っていることを教えてあげることができた ・教えることの難しさと楽しさを知った ・面倒を見ることの苦勞を知った 	<ul style="list-style-type: none"> ・喧嘩の解決方法 ・興味を持ってもらえる話が少くない ・注意する方法（個人・複数・集団） ・怒る時の声量 ・優しく言うべきかはっきり言うべきか ・話さない子に対する話しかけ ・接する時に怖い顔になってないか ・子どもが考えていることの把握 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育実習で活かしたい ・反応の観察 ・気を配る
B	<ul style="list-style-type: none"> ・教育実習に向けて心構えができた ・先生の仕事をすることができた ・児童とのコミュニケーションがとれた ・教員を目指す仲間に出会えた 	<ul style="list-style-type: none"> ・手伝うべきか、見守るべきかの判断 ・自分の授業は改善点が多い ・ほめるときのパターンの少なさ ・名前がなかなか覚えられない 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育実習で授業に活かす ・コミュニケーションの方法 ・積極的に話しかけていく ・地味な努力も怠らない
C	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの行動を学べた ・行動を予想して注意することの重要性を学んだ 	<ul style="list-style-type: none"> ・注意の仕方 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちとの接し方
D	<ul style="list-style-type: none"> ・教育現場の現状について観察できた ・自分に足りていない能力を養えた 	<ul style="list-style-type: none"> ・配慮がもう少しできるようにする ・子どもが主体となる授業づくり 	<ul style="list-style-type: none"> ・力をつけ現場に出た際に生かす
E	<ul style="list-style-type: none"> ・将来教師になったときのイメージができた ・教師の取る行動に意味があることを理解できた ・身近な大人であるという自覚が持てるようになった 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童との接し方 ・授業の展開の仕方の工夫 ・たくさん知識をつける 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題をこなして理想の教師像をイメージしながら頑張る
F	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的に挨拶を行った ・生徒の顔をきちんと見ながら話すように心がけた 	<ul style="list-style-type: none"> ・声をかけられないときがあった 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の工夫を参考にしたい

子どもに対して注意をすることが難しく、子どもとの関わりで苦勞した学生が多く見られた。その一方で子どもとの距離感をそれほど意識しなかった学生がいる。

成果としては教職や指導の仕方についての理解を深めた学生が多いが、課題としては子どもの注意の仕方があげられる(表4)。その後の活かし方としては、子どもとの関わり方や授業など多様であるが、省察については実地ノートに実施内容を記述する欄はあるが、考えたことの記述は求めているため、事後指導でのレポート作成、アンケート調査、話し合いなどに限られている。書くことを通して自分の課題をどれだけ具体化し、改善のために大学での学びをどうするか(ふれていた学生は1名)、教育実習へのつながりについては4章で検討したい。

3. 介護等体験

3.1 意義・役割・課題

「介護等体験」は小学校および中学校の教育職員免許状を取得する教職課程履修学生に対し、特別支援学校において2日間、社会福祉施設において5日間以上、介護や介助、交流などの体験を義務づけた「介護等体験特例法」に基づく制度である。その目的は「個人の尊厳と社会連帯の理念に関する認識を深める」(介護等体験特例法第1条)ことで、少なくとも義務教育に従事する教員が高齢者や障がい児、障がい者に対する介護等の体験をもち、個人の尊厳および社会連帯の理念に関する認識を深め、人の心の痛みを理解し、人間一人ひとりが違った能力や個性を有しているということを再認識することが必要である。

介護等体験の意義について、伊藤(2010)は学生アンケートより自分自身の在り方や生き

ることの意味への問い直しを導き出している。

「一見、関係がなさそうであっても、その人の心に直接響くような何かを体験する。そういう機会が大学生には必要なのかもしれない。」と述べている。土井(2017)も介護等体験を通して人間としての尊厳を深く認識し教育者への第一歩となると述べ、教師としての資質にもつながる「温かい心」で人々に接することのできることを介護等体験の意義と考えている。

その一方、田中・片岡(2006a)は特別支援教育よりの立場で授業の在り方や方法を知り、障がいのある児童生徒にふれあう経験を通して障がいに対する正しい経験をもつきっかけとなる体験活動であると述べている。

この他、同じくアンケート調査にもとづく研究(三輪, 2001; 梅澤, 2008)、体験の感想を分析し何を学び、どのように感じたかを明らかにしようとした研究(茅野ほか, 2008)、学んだことと体験内容を結びつけようとした研究(小川・稲垣田, 2011)、振り返りレポートから体験や人との接し方、スタッフ・教員からの学び、人間としての成長、教師としての資質向上より述べた研究(荻野, 2016)がある。

実習体験で人との関わりや学びに個人差があったことは今後の指導上の課題となるが、統計手法を用いた研究としては藤田(2001)と佐藤・和田・藤田(2000, 2001)が介護等体験後の意識調査から因子分析によって特徴的な因子として「思いやり」「将来の自己」「内省」などを抽出している。茅野ほか(2008)も指摘しているが、内省や省察の構造に踏み込んだ考察が求められる。

介護等体験の効果については田中・片岡(2006b)が質問紙調査により社会福祉施設と特別支援学校での体験について述べ、障がいや

障がいをもつ方との接し方についての理解を深め、思いやりの気持ちを持ち、施設や学校の様子を知る上では介護等体験は効果があったと述べている。子どもを教え・子どもから学ぶ関係をつくる基盤となり、人間関係を構築する力につながるともいえよう。

しかし田実（2008）が指摘するように介護等体験で得たものが教員の資質向上に寄与するかが問われなければならない。その意味でも大学での事前学習と事後学習が重要な意味をもつ。また介護等体験だけに限らず、他の実習科目の成果と課題を照合しながら教職課程における学びの中で位置づける必要がある。

介護等体験の事前学習の必要性については柏崎（2014）と定金（2017）、庄司（2019）が障がいや老いに対して理解を深め、心構えをもたせることにより、実習の不安の軽減につながっていると述べ、和田・中林（2015）も介護等体験の満足度を向上させるために必要であると指摘している。

学習方法については、田中・片岡（2006a）が介護や介助の仕方を体験する機会を設け、福祉教育や障害児教育について討論することにより理解を深められると提案している。いずれにしても介護等体験を行う意味を理解させることが最低限必要であるが（新崎，2005）、瀬沼（2006）のいう、事前に生活の基本やマナーを身につけさせる必要が大学にあることも看過できない。庄司（2019）も、施設や学校側との連携を深め、大学側は一層、丁寧な対応をしていく必要があると述べている。

事後学習については田中・片岡（2007）が何を学んだのかを深く考えさせ、感想を聞き合うことで、さらに老いや障がいについて深く考えるきっかけとなると指摘している。また竹田・

和田（2018）は介護等体験（特別支援学校における実習体験）を通して身に付けてほしいこととして「子どものよいところを見つける姿勢」をあげている。佐藤（2017）は事後指導で体験内容と結びつけて学びを深め、自己意識の変容を促すまで高めることが必要であると指摘している。

大学では介護等体験の学びをその後の教職課程での学びにどう活かしているかを追跡して明らかにする必要がある。

3.2 本学の介護等体験

「介護等体験」を履修する3年生（2018年、名古屋キャンパス）は18名である。回答者の性別は女性9名、男性9名である。このうち学校インターンシップを履修したのは女性2名、男性3名である。「介護等体験」は2018年度より単位化し、事前指導および教職センターによる指導と事後指導を受けることを義務づけている。体験先の社会福祉施設は県社会福祉協議会、特別支援学校は県教育委員会が決定した施設・学校である。体験後に教職センターからのアンケートに回答するとともに事後指導でグループワークを行い、「介護等体験を振り返って」についてレポートを提出させている。本章ではアンケート調査の結果とグループワークのまとめ、レポートをもとに述べてみたい。

事前指導では介護等体験の趣旨と意義、特別支援学校の教育、高齢者・障害者の心理、参加上の諸注意について各担当教員がテキストや資料を用いて説明しているが、筆者の担当である特別支援学校の教育は全国特別支援学校校長会（2018）と文部科学省の「特別支援教育」（http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/004.html）、学校基本調査の結果や当該特別支援学校のウェブサイトを利用し

て特別支援教育，県内の特別支援学校，特別支援教育の特色，特別支援学校で学んだことを教科教育等へ活かすために着目すべき点，昨年度のアンケート結果などについて説明している。

事後指導では特別支援学校と社会福祉施設での実習体験をもとにそこで何を感じ，何を学んだかについて一人ひとり考えるとともにグループで話し合っ出てされた意見を発表し，最後に「介護等体験を振り返って」というテーマでレポートを作成させている。

3.3 活動内容と学生の意識

次に介護等体験に参加した学生の記述から特徴としてあげられることを述べてみたい。実習を行った社会福祉施設は4施設で，ほとんどは作業所Cである。特別支援学校は愛知県内のY校が多い。

体験内容は施設差，個人差が見られるが，補助・介助が社会福祉施設で最も多く，会話と掃除，作業も多い。特別支援学校では授業補助と送迎が多い（表5）。

介護体験中に困ったことと感想をみると，困ったことと心に残ったことはいずれも社会福祉施設の方が多く，年長者に対してどの程度関わればよいかに苦労していたようであるが，次第にうまく交流できると心に残る思い出となり，特別支援学校の生徒との交流も同じである（表6）。感想では，今後に活かしたいと述べる学生が多く見られた。

社会福祉施設における学びとしては，障がいをもつ方を理解し，接し方やコミュニケーションの仕方を学ぶ，相手に合わせることを実践することをあげた者が多かったが（表7），社会との関わりや将来に生かせる知識や技術を学ぶと回答した者もいた。

課題としては，相手の立場に立ってしっかり聴くこと，積極性をもってもっとコミュニケーションを取ることがあげられていた。

特別支援学校における目標としては多岐に亘っていたが，障がいを持った生徒への接し方，コミュニケーションの取り方，相手にあった・気持ちにより添う態度などをあげ，課題としてもコミュニケーションをあげていたが，自分の教科の授業に特別支援教育で学んだことをどう活かすのかについてふれ，一人ひとりを活かす指導を通常学級でも行う必要性にふれている者はいなかった。

事後指導のグループワークでは，実習内容，教員や職員からの学び，成果と課題について話しまとめさせた（表8）。コミュニケーションをとり，一人ひとりに合わせた対応が必要で，相手の言動から読み取る力をつける必要性を感じたようである。福祉教育や障害児教育，社会のあり方まで踏み込んで指導できていないが，次年度より開講される特別支援教育に関する科目に委ねたい。

表5 介護等体験の施設別学生数と体験内容

施設学校	参加学生数	社会福祉施設					特別支援学校					
		補助介助	会話	掃除	レク	作業	授業参観	授業補助	交流	食事介助	送迎	施設見学
A	1	2	1		1	1						
B	4	8	2	1	2	8						
C	11	2	1	1		3						
D	3	2		2								
X	1							1			1	
Y	18						7	18	2	3	7	1

教職課程における理論と実践の往還

表6 困ったことと心に残ったこと

	困ったこと	心に残ったこと
社会福祉施設	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者を把握して接する ・どの程度介助すべきか ・どの程度手伝ってよいのか ・会話 ・相手に合わせた作業 ・仕事内容の把握 ・利用者への対応 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の言い方や接し方で相手の態度や気分が変わった ・コミュニケーションの大切さを実感した ・利用者がテレビ番組やゲームが好きである ・昼休み中の利用者との会話 ・一人一人の個性を感じた ・意思がはっきりしている人は感情が伝わるから理解できる ・挨拶がきっかけでコミュニケーションを取れるようになった ・本人ができることは見守る ・元気よく挨拶してくれたり積極的に接してくれた ・伝えることが難しい ・最終日に別れを惜しんでくれた ・その人ができることとやりたいことを奪わないように配慮する ・利用者が教えて下さったりたくさん話しかけて下さった ・自分でやれることは手をなるべく出さないようにしていた ・人生を豊かにするために仕事をしている人達に感動した
特別支援学校	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒への対応 	<ul style="list-style-type: none"> ・先生に「実習中、絶対寝な！」といわれた ・テレビ番組やゲームが好きではまっている ・一生懸命に自分でしようという気持ちが伝わってきた ・意思がはっきりしている人は感情が伝わるから理解できる ・全てフォローするのではなく本人ができることは見守る ・元気よく挨拶してくれたり積極的に接してくれた ・文化祭の作品を一生懸命作っていた ・コミュニケーションをとることができた ・笑いあえた ・伝えることが難しい ・自分でやれることは手をなるべく出さない

表7 介護等体験における学び（次頁に続く）

受講者	社会福祉施設		特別支援学校	
	学ぼうとしたこと	学んだこと	学ぼうとしたこと	学んだこと
1	<ul style="list-style-type: none"> ・人との接し方 ・年長者とのコミュニケーション 	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶とコミュニケーションの大切さ ・目を見てしっかりと聞く 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の関わり方 ・授業 ・コミュニケーション ・現場の先生の考え方 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手との時間を大切にすること ・真剣に向き合う
2	<ul style="list-style-type: none"> ・個人の尊厳と価値観の違い 	<ul style="list-style-type: none"> ・流行を知る ・できる限り自分で行う 	<ul style="list-style-type: none"> ・広い心 	<ul style="list-style-type: none"> ・流行を知る
3	<ul style="list-style-type: none"> ・サポートの仕方 ・会話と作業 	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者の活動 	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ人間である ・気持ちに寄り添う行動 	<ul style="list-style-type: none"> ・アイコンタクトやジェスチャーで会話できる
4	<ul style="list-style-type: none"> ・スムーズな作業 ・相手に合わせる 	<ul style="list-style-type: none"> ・サポートの仕方 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の気持ちを考えた行動 	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の気持ちを汲み取る
5	<ul style="list-style-type: none"> ・個人の尊厳と価値観の違い ・様々な人と交流 ・抱えている問題 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会貢献の仕方 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの援助 ・個人の違い ・価値観の理解 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人ひとりにあった指導 ・私たちと学び方やコミュニケーションの取り方は違っていった
6	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな方に合わせた対応 	<ul style="list-style-type: none"> ・対応の仕方 ・スムーズな作業 ・コミュニケーション 	<ul style="list-style-type: none"> ・できることは自分でする ・相手の方との関係をしっかりと考えて接していく 	<ul style="list-style-type: none"> ・すべてサポートしない
7	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションの取り方 ・サポートの仕方 	<ul style="list-style-type: none"> ・サポートの仕方 	<ul style="list-style-type: none"> ・どう接していくのか 	<ul style="list-style-type: none"> ・できることは自分で行い成長を図ろうとしている
8	<ul style="list-style-type: none"> ・思いやりのある対応 	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶の重要性 ・広く周りを見る 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業 ・教員の注意点 	<ul style="list-style-type: none"> ・全員に気を配り、授業は円滑に進められていた ・やることの早さと正確性

名古屋学院大学教職センター年報

受講者	社会福祉施設		特別支援学校	
	学ぼうとしたこと	学んだこと	学ぼうとしたこと	学んだこと
9	<ul style="list-style-type: none"> ・社会との関わり方 ・仕事の内容と方法 ・利用者との関わり方 	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれのペースで作業をする ・しっかり見守り、時に声かけ ・一人ひとりの様子を見る 	<ul style="list-style-type: none"> ・教師と生徒との距離 ・生徒との関わり方 ・授業中の工夫 ・生徒の様子 	<ul style="list-style-type: none"> ・見守ることの大切さ ・授業中も周りの生徒の様子をよく見ていた ・コミュニケーションを取るることの大切さ
10	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションの取り方 ・一人ひとりの理解 	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事のやり方やスピードの違い ・しぐさや表情を見てコミュニケーションをとる 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の学習 ・関わり方 	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションが取れた ・クラスによって勉強の仕方や学ぶ内容が違っていた
11	<ul style="list-style-type: none"> ・個人の尊敬と社会連帯 ・介護と交流 	<ul style="list-style-type: none"> ・個性を大切にすること ・自分でできることや得意なことをする ・仕事への意識を高める 	<ul style="list-style-type: none"> ・個人の尊敬に対する意識 ・社会連帯 	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションの取り方 ・障がいの程度に合わせた教育
12	<ul style="list-style-type: none"> ・多くのこと 	<ul style="list-style-type: none"> ・対応の仕方 ・コミュニケーションの取り方 	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションの取り方 ・授業での配慮や工夫 	<ul style="list-style-type: none"> ・安全面への注意 ・言葉だけでなく表情から読み取る
13	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉遣い ・どこまで手伝うか ・コミュニケーションのとり方 ・手伝う方法 	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的にコミュニケーションをとることの大切さ 	<ul style="list-style-type: none"> ・先生方の動きをしっかりと見る ・生徒の動きを見る ・コミュニケーションをとる ・できることは手伝わず寄り添う 	<ul style="list-style-type: none"> ・学ぶことの多い体験
14	<ul style="list-style-type: none"> ・介護，障害 	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者とコミュニケーションを取る 	<ul style="list-style-type: none"> ・障害を持っている生徒に対してどのように接していくべきか ・障害の内容を理解し個別に対応できる力 	<ul style="list-style-type: none"> ・意思疎通はよくできた
15	<ul style="list-style-type: none"> ・生活 ・支援者の動き ・心かけ 	<ul style="list-style-type: none"> ・豊かな暮らしや充実した毎日とは何か ・自分でできる方法を考えることはできる ・一緒に行動することでその人の人生が豊かになる 	<ul style="list-style-type: none"> ・障害者の生活，支援者の対応と生活 	<ul style="list-style-type: none"> ・障害を持つ人に対する意識が変わった。目標をしっかりと持ち努力できるいい人ばかりだった
16	<ul style="list-style-type: none"> ・生きる力の支え方 ・人格の尊重 ・積極的関与 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人一人にあった介助が大切 	<ul style="list-style-type: none"> ・社会が弱い立場にある人をどのように保護し，生きる力を支えているかを体験を通して知る ・人格を尊重しながら積極的に関わる 	<ul style="list-style-type: none"> ・実習中に寝ると言われたことが印象に残っている
17	<ul style="list-style-type: none"> ・相手の理解 	<ul style="list-style-type: none"> ・できることを奪わない 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の気持ちにより添う先生の行動 ・学校生活や学習の様子 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分でできるようになるまで見守っていたのが印象的

教職課程における理論と実践の往還

表 8 事後指導のグループワークのまとめ

		グループ 1	グループ 2	グループ 3	グループ 4
特別支援学校	内容	文化祭準備、授業補助（カーリング、ボルトリング、ダンス）、車いす助、衣服着脱	授業補助、作業学習、お見送り・お迎え、話し相手	図工やプールなどの授業見学、出迎え・見送り、リハビリ、食事の介助	授業観察・補助、課題授業の手伝い、食事介助・トイレ、朝礼と終礼
	教師からの学び	一人ひとりに合わせた接し方、常に注意を払うこと	明るくふるまうこと、生徒の把握、目線をあわせる	最初は見守る、積極的にコミュニケーションをとる、模範になる行動をとる	生徒の特徴を理解する、甘えさせない、ほめる、見守る
	成果	小さな変化に気づける	性格をつかむことの大切さを再認識した、推測して行動する、声をかけ続ける	生徒一人ひとりに合わせて対応することができた、生徒の特性を理解する、雰囲気が出た、言葉じゃなくてもコミュニケーションはとれる	相手の行動を読み取る、身体で表現する、生徒の目線に立つ
	課題	表情から読み取る、一部の生徒しか接することができなかった、積極性が少なかった	自発的に行動を促す、分かりやすく伝える、どういった授業・クラスかをイメージする	その子に合った対応をする必要がある、あまり質問できず事前に考えておけばよかった	すべて行わない、考えさせる、生徒自身で発見・解決させる、個性を重視する、コミュニケーションをとる
社会福祉施設	内容	仕事の補助、トイレの介助、レクリエーション、昼食を一緒に取る、リサイクル回収、散歩	作業支援、レクリエーション（カラオケ、パズル）、介助、散歩、行楽	見守る、できることを増やす、レクリエーション、生活介助、お誕生日会、連絡帳記入、リハビリ、作業	生活支援、食事手伝い、入浴、仕事の体験・補助、体操、散歩
	職員の方からの学び	仕事の意欲を出すための声かけ、ほめるときと怒る時の切り替え、状況に応じて冷静な判断をする	できることを増やす、作業を細分化する、人間関係を考慮している、職員全員が利用者を理解している	冷静に判断する、利用者さんの話を聞く、意見を尊重する、病状に応じた介助をする、自分のしたいことをさせてあげ質問意見を発表する場を設ける	やさしい、助け合い、明るい、いけないことは注意する、個性の理解、好物の把握
	成果	すべてをしてあげない、障害を持つ人の生活	目標を設定し達成できた、気配りができた	作業をやらない利用者の意欲を出す方法、できることとできないことを見分けてさせてあげる、積極的にコミュニケーションをとる	一人ひとりの特徴をつかむことができた、相手の立場にあって考えることができた
	課題	相手の気分によって接し方を変える	動作に気をつける、好きなことと嫌いなことの区別ができる	できないと思いついてしまったことがあった、できることとできないことの見極めが難しかった	コミュニケーションをとる、利用者に向けた対応をする

4. 教育実習

4.1 意義と効果

教育実習は、教育職員免許法施行規則第6条に基づき、大学で学んだ理論や知識を基礎として、学校現場で豊かな経験を積んだ教員の指導のもと、具体的・実践的な教育活動を経験することによって教育の実務についての基礎的な理解を深め、教育者としての態度や心構えを養い、教育の実践的な技能を身に付けることを目的とする。

望月（2017）は現実の教員の姿や仕事内容を知る機会であり、教員としての文化規範を身につける活動であると位置づけている。教員の職務を肌で感じ、子どもに対する接し方を試しながら学べ、現場教員の経験によって培われた知識や技術を習得でき、職業選択を行うための判断材料が得られると述べている。

教育実習の実施効果について、松宮（2016）は質問紙調査により検証・評価し、自己肯定感や自己効力感が高まった一方、教科指導に対す

る不安が高まり、知識不足や認識不足を再認識したのではないかと述べている。また相良麻里・相良陽一郎（2016）は教育実習生に不足しているのはソーシャルスキルであると指摘し、教師教育の研究では日常生活スキルをもとにアンケート調査結果より検討し、関係の開始、表現、問題対処、関係維持のスキルを高めておくことが必要であると分析している。

経験から学ぶことも多いが、湯口（2015）はショーンの「行為の中の知」「行為の中の省察」「状況との対話」を環境として設定することが重要であると述べている。教育実習では子どもと毎日かかわる中で起こる出来事が経験となり、そこでどのようなことを思考し、行動したかという「行為」の変化を点検することが必要で、実習日誌への記録と指導教諭のコメントを読み返すことがそれにあたる。経験した出来事を、これまでの出来事と結びつけて、新たな実践知を再構築することが行為の中の省察である。

これに対して中山（2007）はなぜ学生は教職への強い志望意識を持ちうるのかを明らかにするため、大学で培う創造性と倫理性に着目し、教職への志望意識との関係について考察している。大学での学びや経験が教職への志望意識を高めているかについては、入学時より卒業まで追跡調査する必要があるが、そこまでの時間と費用をかけなくても、意識が変わる可能性のある複数の実習科目における学生の記述や発言などを分析すると何らかの知見が得られるのではないだろうか。

4.2 本学の教育実習

本学で教育実習を行った4年生（2019年）は28名で、回答者の性別は、秋学期に教育実習を行う2名を除く女性11名、男性15名である。

このうち学校インターンシップを履修したのは、女性3名、男性3名である。

教育実習は学級経営・管理、教科指導（教材研究、学習指導案の作成など）、生徒指導（学級活動、生徒会活動など）、学校行事の指導など内容は多様で、学校や指導教諭によっても異なる。

本学では事前指導は3月中旬に2日間にわたって行われ、教育実習の意義、生徒指導・道徳教育・特別活動の進め方、教育実習の心構えについての講義と教育実習の内容や実習生の授業場面についてのビデオ視聴があり、2日目は各教科に分かれて教科教育法の授業担当者の指導のもと、学習指導案を作成し、代表者が模擬授業を行い、その授業の講評を出席した教員全員により行う。

直前指導では具体的な準備や心構えについての講義があり、観察・参加実習の要点や最終的な諸注意なども確認する。

事後指導では各自が教育実習の経験を反省して、何が不足し、どう改善したらよいかについて相互に確認し「教職実践演習」につなげる。各学部より代表者が体験談を発表し、それをふまえて自らの体験を振り返る。

4.3 意識の変化と身に付けたこと

教育実習修了後のアンケート結果を見ると保健体育と商業、英語の学生は緊張や不安はあったが、教育実習でやりがいを得て、教師になりたい気持ちを高めている（表9）。その一方、教育実習中は苦痛で教師になりたい気持ちが弱まった者もいる。

指導方法についての記述はどの教科でも見られるが、保健体育の学生は「注意」「伝える」「生徒との距離」、商業の学生は「伝える力」「責任感」を多く用い、教科の特性が表れてい

教職課程における理論と実践の往還

表9 事後アンケートのコメントでの使用

回答数	充実	嬉しい	不安	緊張	苦痛	成長	達成感	やりがい	感謝
体育	12	2	3	3	3	1	1	3	1
商業	3		3	1	1	1	1	3	1
情報	1								
社会	6	2	1	1	1	4	1		
英語	4	3	1	1	1				1

回答数	教師希望	指導方法 指導技術	注意	責任感	教材研究	生徒理解	関わる	生徒との距離	伝える力	
体育	12	5	12	5	1	1	2	8	2	3
商業	3	2	2	1	2	1	1	2	1	2
情報	1		1					1		
社会	6		6			2		4		1
英語	4		3	1	1		1	2		

表10 教育実習で学ぶ・学んだこと

学ぶこと		
<p>【教職の理解】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・業務 (6) <p>あり方/心がまえ/やりがい/ スケジュール/学校の教育方針/ 教師に必要な力</p>	<p>【対生徒・教師関係】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒との関わり方 (10) ・コミュニケーション (9) <p>臨機応変な対応/問題への対応/生徒理解</p>	<p>【授業】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・構成・展開 (7) ・授業以外の活動 (5) ・指導案作成 (5) ・進め方 (4) ・工夫 (3) ・板書 (3) ・つくり方 (2) ・伝え方 (2) ・指導技術 (2) ・指導方法 (2) ・教材研究 (2) ・学級経営 (2) <p>学ぶことの重要性/ 指示/内容/ 興味関心/ スライド作成</p>
学んだこと		
<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の興味をひくこと (3) ・授業の進め方 (2) ・多くの知識や材料が必要 (2) ・イメージや計画をもつ ・楽しく理解できる工夫 (2) <p>工夫した授業を展開する/生徒の目線で指示を出す (明確さ)/指導技術/伝え方/生徒の発言にコメントする/授業の雰囲気を作る/評価/教材研究の大切さ/分かりやすさ/生徒に考えさせる授業</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業をつくることの大変さ、一方的な授業にならない ・生徒目線で問題解決能力を育てようとしていた ・生徒主体で学習課題を考えさせ、考えるまでの土台作りが必要 	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションの大切さ (2) ・生徒主体 (2) ・安全重視 (2) <p>生徒は繊細で接しづらい/生徒に学ぶことの大切さ/教員は生徒を守る/生徒との接し方/生徒に対する言葉遣い/生徒の素早い理解/生徒との距離の取り方/臨機応変な対応/気遣い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・信頼関係を築くにはダメなことを指導できる力が必要 	<ul style="list-style-type: none"> ・責任を持って取り組む (2) ・自分の影響力 (2) <p>業務一つ一つが生徒のため/教師の仕事と心構え/経験が重要/教員の役割/学級運営</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育方針や学校目標にしたがって授業を行い学校行事を設定 ・優先順位をつけて仕事をこなす、生徒優先

る。学生が考える教育実習で学ぶことと学んだこと (表10) について、大きく「教職理解」「対人関係」「授業など」に分けられるが、教職と

心構えに関する記述は保健体育の学生に多い。その一方で生徒と交流が十分でなかった学生が、生徒主体の授業づくりに苦労したケースもある。

表 11 教職に関する科目の GPA と単位修得科目数

	2016年春		2016年秋		2017年春		2017年秋		2018年春	
	GPA	修得科目数	GPA	修得科目数	GPA	修得科目数	GPA	修得科目数	GPA	修得科目数
全体	2.6	1.8	2.0	1.6	2.4	4.2	2.5	3.8	2.5	2.6
学校インターンシップ未履修者(21人)	2.6	1.8	1.9	1.4	2.2	3.9	2.4	3.7	2.6	2.8
学校インターンシップ履修者(6人)	2.8	2.2	2.3	2.0	3.0	5.2	2.8	4.3	2.0	1.8

(注) GPAは教職に関する科目に限定

学校インターンシップ経験者の記述をゴシック体で示したが、学ぶことについては他の学生と大きな違いは認められないが、教育実習後の記述をみると「教職理解」「対人関係」「授業など」とも踏み込んだ内容となっている。

次に教職に関する科目に限定して、全体・「学校インターンシップ 1」の履修者・未履修者に分けて成績を見ると、全体的に1年秋学期に下降するが、2年次に持ち直してそのままの状態を維持している(表11)。「学校インターンシップ I」履修者の方が、早期に科目を修得し、成績においても下降幅が小さい。

また履修カルテの自己評価(第1学年から第3学年まで)をみると(表省略)、「使命感・責任感・教育的愛情」については、どの項目も値が高く、社会性・対人関係能力については、学校インターンシップ履修者の方が「挨拶」「身だしなみ」「傾聴」の値が0.5ポイント以上低い。これは、学校現場の出入りが多い者の方が「慣れ」により挨拶や服装などをそれほど意識しなくなっているためではないかと考える。「生徒理解と学級経営」については、1年次の学級経営の値が低い、学年が進むにつれ上昇している。教科指導力については「教科書内容理解」「語り」「授業」「特別活動」「総合的な学習の時間」「教材研究」で学校インターンシップ

履修者の値が高く、現場体験者の強みが表れている。

最後に自己評価から成果と課題を学校インターンシップの経験により分けて整理してみた(表12)。学校インターンシップ経験者が6名、未経験者が20名であるため、記述量で比較はできないが、「社会性・対人関係」で学校インターンシップ履修者が課題を抱えている。自己の問題を克服するためにこの科目を履修したとも考えられる。

5. 考察—演習科目と座学科目の関連

以上、本学の演習科目である「学校インターンシップ」「介護等体験」「教育実習」(各事前・事後指導含む)を対象として先行研究の知見と本学での実践を対照させながら述べてきたが、筆者の意図しない結果も表れている。普段から「教師は授業で勝負する」のようなことを言っている学生に教材研究の重要性と知識を多くもつ必要性があることを説いても、学生は生徒との交流を重視し、グループ学習やアクティブ・ラーニングで乗り切ろうと考えている。生徒主体の学習形態は、生徒の考えや行動を予想して学習課題を設定し、関連する教材を広く深く研究しておくことが必要となるのだが、その準備

表 12 教育実習後の自己評価からみた成果と課題

	学校インターンシップ未受講者		学校インターンシップ受講者	
	能力が伸びた	能力不足	能力が伸びた	能力不足
使命感 責任感 教育的愛情	安全の意識 (4) 責任 (2) 時間通りに進行 自分のすべきことを発見 生徒の手本となる行動 教師として行うべきこと 立場の意識 生徒を想う心 自分の発言の影響力の理解 丁寧な発言 やりがいの再確認	言葉の選び方 (3) 保護者の対応 (2) 仕事の優先順位づけ 信頼の得方	教育に対する使命感 自分の発言の影響力 全体の奉仕者としての意識 熱意 教育への心構え	自分の主張の弱さ 言葉の選び方 広い視野 スケジュール管理
社会性 対人関係能力	コミュニケーション (6) 挨拶 (2) 意見の尊重 (2) 協力 (2) 連携の大切さの理解 (2) 礼儀 話し方 良好な関係 敬意を払った行動 言葉の選び方		笑顔で挨拶 会話 立場をわきまえた行動 自分の意見を述べること	雰囲気の違い 集団の統率 言葉の選び方 社会性 積極性
生徒理解 学級経営	コミュニケーション (8) 生徒の観察・理解 (7) 生徒にあった指導 (5) 生徒との関わり方 (4) クラスの雰囲気づくり (2) 生徒のことを意識した話し方 (2) どこまで介入すべきかを考えた 行動 語る 生徒を考慮すること 指示できる 学級経営 中心人物から輪を広げること 生徒との信頼関係の構築	平等に接すること (6) 生徒にあった判断・指導 (5) けじめをつけさせる・叱る 注意すること (5) 全体を見た行動 (3) 声かけ (3) 生徒理解 (2) 対応力 指示 生徒の関わり方 生徒目線で考えること 生徒との距離の取り方 生徒の質問への対応 生徒の発達段階の理解 全体の統率 配慮 先読み 授業時のクラスマネジメント 生徒の発言の活かし方	コミュニケーション (2) 生徒の性格をふまえた接し方 (2) 生徒理解 学級の雰囲気や特色の理解 受容的態度	コミュニケーション (3) 生徒指導 生徒理解 生徒の手本となる言動 生徒の流行の理解 信頼関係づくり 目線 観察 考察する力
教科指導力	生徒の意見を重視して授業を構成する 社会的な問題を授業に取り入れた 授業の構成や展開の理解 授業の進め方 (3) 授業内容についての知識 (5) 板書の仕方 (4) 発問 学習指導要領の内容を理解しそれ にあった指導を行う (2) 熱中して授業に取り組ませる 説明・伝え方 (4) 教材研究 興味・関心を持たせる ICTの活用 (2)	生徒のことを心の底から思う (2) 生徒の意見を予想し授業をどう 展開するか 生徒に合わせた指導 授業に参加する意欲を高める 興味を持たせる指導 内容の工夫 (2) 内容理解 (2) 知識 (4) 分かりやすい説明 (4) 教材研究・準備不足 (5) ICTの活用 生徒の質問に瞬時に答える能力	視覚的に理解させる工夫 小学校の授業を意識した授業 づくり 教材研究 (2) 指示 説明 ICTの活用	生徒主体の授業づくり 教材研究する力 声やテンポが一定 知識不足 (3) 考えさせる発問 時間配分 指示 説明 (2) 活動 生徒の言動を誘導し目 標に到達できなかった 指導方法 (2) 臨機応変な対応

が不十分である。説明中心の授業と活動中心の学習の両方ができる経験を積むことにより、省察の幅が広がる。

「学校インターンシップ」は学校現場と子どもとの関わり方、仕事について体験的に理解する科目で、子どもとの関わり方が課題であり、「介護等体験」は障がいや老いの理解とともに

人々との関わり方や生き方について理解を深め、「教育実習」では教科指導力や生徒理解・指導、教職理解を深める科目であるが、それぞれの科目の役割が異なることは学生にも理解されて、「学校インターンシップ」参加の有無で「教育実習」で得られたことにも相違が認められる。

筆者は、かつて中学校・高校の現場で教員と

して勤め、実践知を求めていた。現在は、大学で「学校インターンシップ」（2年）、介護等体験（3年）、教育実習および教職実践演習（4年）、座学の教育系科目（教職論、教育原理）と社会科教育法（2年）、内容科目も担当し、学問知を追求している。大学では科目の知識や理論は独立して存在し、教員は学生に座学科目の知識や理論を理解・身に付けさせながら、演習科目に結びつけるとともに、演習科目の実践知を学問知に位置づけようとしている。しかし教員がそれらの方法を学生に示さない限り、学生が学問知と実践知を照合させることは行われないであろう。大学の教員は学問知にもとづきながら実践知に歩み寄ることが求められる。

OECD（経済協力開発機構）は実践から学び、批判的に考える力が必要であると述べ、リフレクション（省察）をキーコンピテンシーの核心に位置づけた。F. コルトハーヘン（2012）は「行為→行為の振り返り→本質的な諸相への気づき→行為の選択幅の拡大→試み」へと発展させる図式を示している。ここで着目したいのは、この図式を通して学生がどのような活動を行い、能力を向上させるかよりも、指導教員が各局面でどのようなことに留意すべきかである。

F. コルトハーフェンが示す図式の第3局面の「本質的な諸相への気づき」で、教員は理論を用いるが、その理論は学生の特定のニーズや具体的な状況に適合するものでなくてはならないと考えている。大学の授業におけるリアリスティック・アプローチとして模擬授業があげられるが、模擬授業を行う意義として、F. コルトハーフェンは、指導者が学生に安心感をもたせ、学生の長所を補強し弱点に向かいあうことを指摘している。さらに学生に主導権をあずけ、安定と挑戦のバランスを保ちながら、指導技能を

向上させることを目標としているが、可能であろうか。

第1局面の「行為」では、学生本人が求めたときのみ教員は支援し、その支援は、学生が有用な選択肢を見つけるために行うものであり、教員が学生に選択させず、考えさせないことは認めていない。自己評価を重視しているが、それは成長し続ける力を発達させるため、ゆっくり慣らしながら進めるのがよいと主張している。また、経験しながら学び、理論を自身のニーズや関心と結びつけ、学問知よりも実践知を発達させるべきであると述べている。リフレクションの図式を学生が自らたどり、学習を進化できるか、学び続けられるかが試されている。

第3局面の「本質的な諸相への気づき」では、自分自身について考え、結論にたどり着けるように教員が激励する。手順としては、まず自らの経験を分類、一般化、構造化して、次に自身の行動の仕方や考え方、欲求、感情について省察を行う。教員は安心感を与える指導技能（受容と共感、誠実さ、具体性）が求められている。

第4局面の「行為の選択幅の拡大」では、解決方法を学生が探し当てられないときに教員が支援する。その支援は、道筋を考察し最適な道筋を選択するためのものである。

第5局面のより高いレベルの学び（試み）では、理論的な概念や原理を教える。ここでは学びを継続させるための支援が求められるとしている。

J. ロックランは、高等学校の理科教員の経験より、教師はいかに教えることを学び、その学びを実践に活かし、知識・技術・資質を高めていくかに関心をもち、教員養成教育や現職教育、政策立案決定など、多様な観点から教師教育の在り方に示唆を与えている。学問知と実践知の

関係についても意識し、教師教育者と学生の立場に分けて、どのように発展・共有されるのかについて述べている（J. ロックラン，2019）。

実践知は学問知への中間地点で、さまざまな状況における実践の類似点や相違点の吟味の下で試され、再定義され、立証されて「より確かな知」となる。教師教育者は実践を批判的に検討し分析するとともに教師教育の複雑さや難しさと向き合っていく必要がある。学問知と実践知は相互補完関係にある。

また、教師教育者の実践原理を関係性、目的、モデリングに分け、それぞれ関連し合っていると述べている。関係性においては、感受性、信頼構築、誠実さを必要としている。モデリングにおいては、なぜその手法を用いるか、どのように用いるかに対する理解を促すことを必要としている。リフレクションでは何が問題か、枠組みの構築と再構築を求めている。状況を観察し、定義づけをして、それに説明を加え、別の観点からその状況を見ることができるようになるという一連の作業である。問題の認識と枠組みの構築や再構築がその後の教育にどのような影響を与えるかを明確に示すことができると、リフレクションが深まったといえる。

6. おわりに—理論と実践の往還をめぐる課題

本稿では「学校インターンシップ」「介護等体験」「教育実習」の実習科目を取り上げて、学生の記述を比較検討し、大学の学びの中でどう位置づけているかを明らかにすることを研究目的として、本学の事例をもとに、F. コルトハーヘンと J. ロックランの理論や知見を参考にしながら考察を進めてきた。

「学校インターンシップ」「介護等体験」「教育実習」は、それぞれ役割が異なることは学生にも理解されて、「学校インターンシップ」参加者は「教育実習」でより深く教科指導や生徒指導について考えていた。

理論と実践の往還を通して、学問知を創出する大学側と、実践知を重視する学校現場双方に課題があることが認識できる。学生が生徒を見る眼を、大学教員が学生に対して見る眼と重ね合わせながら、事実や実践より省察を重ね、「より確かな知」をつくり出すことが求められている。本稿で取り上げた学生の意識を、フィードバックしてどのように活かすのが今後の課題である。

参考文献

- 愛知県立大学生涯発達研究所・愛知県総合教育センター「スクールボランティア／インターンシップのてびき」
https://www.aichi-pu.ac.jp/education_and_research/syogai/pdf/school-volunteer.pdf
 (2019年9月30日確認)
- 新崎国広「学習主体者の学生から見た介護等体験」,
 日本福祉教育・ボランティア学習学会年報, 10,
 2005, pp. 234-243
- 伊藤直樹「教員養成における介護等体験の意味—
 2006～2008年度介護等体験アンケートの分析から—」,
 明治大学教職課程年報, 32, 2010,
 pp. 41-51
- 院田春香・舟生日出男「振り返りワークシートのテキスト分析に基づく学校インターンシップを通じた教職志望学生の意識変容の把握」,
 日本科学教育学会研究会研究報告, 33 (3), 2018,
 pp. 97-102
- 梅澤嘉一郎「介護等体験における自己達成感に関する

- る研究—社会福祉施設での体験から—, 川村
学園女子大学研究紀要, 19 (1), 2008, pp. 129-147
- 小川裕子・稲垣田鶴美「「介護等体験」を通して学
んだこととその意義—社会福祉施設の場合—」,
日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要,
17, 2011, pp. 5-15
- 荻野佳代子「介護等体験からの「学び」」, 神奈川
大学心理・教育研究論集, 39, 2016, pp. 103-108
- 柏崎秀子「体験活動に向けた主体的な事前学習の開
発とその効果」, 実践女子大学文学部紀要, 56,
2014, pp. 31-41
- 相良麻里・相良陽一郎「教育実習に関する効果的な
事前・事後教育の検討—実習中に求められる日
常生活スキルについて—」, 千葉商大紀要, 53 (2),
2016, pp. 9-26
- 佐藤史文・伊藤博美「「学校インターンシップ」に
関する事例研究」, 和歌山大学教育学部紀要 (教
育科学), 68 (1), 2018, pp. 239-245
- 佐藤真澄「学生が社会福祉施設での介護等体験で「学
ぶ」こと」, 山口学芸研究, 8, 2017, pp. 89-100
- 佐藤嘉晃・藤田圭一・和田美知子「「介護等体験」
実習に関する教育心理学的研究—教職課程履修
学生による実習後調査に基づいて—」, 城西大
学女子短期大学部紀要, 17 (1), 2000, pp. 37-54
- 佐藤嘉晃・和田美知子・藤田圭一「「介護等体験」
実習に関する教育心理学的研究—(その2) 教
職課程履修の大学生による実習後調査に基づい
て—」, 城西大学女子短期大学部紀要, 18 (1),
2001, pp. 39-52
- 定金浩一「特別支援学校における介護等体験の事前
講義に関する一考察」, 大阪産業大学論集人文・
社会科学編, 31, 2017, pp. 69-78
- 庄司和史「介護等体験の意義と実際—体験活動を終
了した学生へのアンケート調査より—」, 信州
大学教職研究, 10, 2019, pp. 9-20
- 瀬沼頼子「「介護等体験の指導」の役割と昭和女子
大学生の体験レポートにみる介護等体験につい
て」, 昭和女子大学学苑・総合教育センター特
集, 787, 2006, pp. 88-97
- 全国特別支援学校長会『新学習指導要領 (平成 29 年
公示) 版 介護等体験ガイドブック フィリア』,
ジアース教育新社, 2018, 254 p
- 竹田麻衣・和田充紀「特別支援教育についての学び
がある介護等体験の在り方に関する研究—教諭
及び支援を必要とする子を保護者を対象とする
調査から—」, 富山大学人間発達科学研究実践
総合センター教育実践研究, 13, 2018, pp. 47-57
- 田実潔「介護等体験による学生の意識変化について
—教職希望学生が介護等体験から学ぶもの—」,
北星学園大学文学部 北星論集, 45 (2), 2008,
pp. 73-81
- 田島充士「学問知と実践知との往還を旨とする大学教
育」田島充士・中村直人・溝上慎一・森下覚『学
校インターンシップの科学—大学の学びと現場
の実践をつなぐ教育—』, ナカニシヤ出版, 2016a,
pp. 1-28
- 田島充士「ヴィゴツキー理論—共創的越境を実現す
るプロセスとしての発達—」田島充士・中村直
人・溝上慎一・森下覚『学校インターンシップ
の科学—大学の学びと現場の実践をつなぐ教育
—』, ナカニシヤ出版, 2016b, pp. 67-85
- 田中敦士・片岡淳「介護等体験の実践に関する研究
(第1報)—琉球大学における実践の現状—」,
琉球大学教育学部紀要, 69, 2006a, pp. 1-8
- 田中敦士・片岡淳「介護等体験の実践に関する研究
(第2報)—体験学生に対する質問紙調査から
—」, 琉球大学教育学部紀要, 69, 2006b, pp. 9-19
- 田中敦士・片岡淳「介護等体験の実践に関する研究
(第3報)—受け入れ学校および福祉施設に対
する質問紙調査から—」, 琉球大学教育学部紀

教職課程における理論と実践の往還

- 要, 70, 2007, pp. 69-82
- 茅野理子・石原勝徳・永井明子・三品享子・舩渡川勉「特別支援学校における介護等体験の意義と内容—平成19年度介護等体験学生の感想等から—」, 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, 31, 2008, pp. 393-400
- 土井進「介護等体験」日本教師教育学会『教師教育研究ハンドブック』, 学文社, 2017, pp. 26-249
- 藤堂栄子編著『学習支援員のいる教室—通常学級のナチュラルサポート』ぶどう社, 2010, 174 p
- 中山博夫「教職課程履修学生の志望意識の変容に関する事例研究—教職課程受講と教育実習での体験に着目して—」, 目白大学総合科学研究, 3, 2007, pp. 83-93
- 橋本祥夫「「学校インターンシップ」の学びと教員養成」, 京都文教大学心理社会的支援研究, 7, 2017, pp. 65-68
- 長谷川哲也「教員養成における「体験的な学び」の原理に関する研究—デューイとショーンの教育思想を手掛かりに—」, 静岡大学教育実践総合センター紀要, 28, 2018, p. 211-219
- 藤田主一「教職課程における「介護等体験」の意義と学生の意識構造に関する教育心理学的研究」, 東京音楽大学研究紀要, 25, 2001, pp. 1-22
- 松宮新吾「教職課程認定大学における教育実習の実施効果の検証に関する研究」, 関西外国語大学研究論集, 103, 2016, pp. 119-135
- 三輪定宣「教員養成・研修における体験学習の意義を問う—介護等体験に関するアンケート調査を踏まえて—」, 教育学研究, 68 (4), 2001, pp. 461-466
- 望月耕太「教育実習と学校体験参加」日本教師教育学会『教師教育研究ハンドブック』, 学文社, 2017, pp. 242-245
- 山口圭介・川崎登志喜・山田信幸・高島二郎・鈴木淳也・工藤亘「学校現場における就業体験の性格と課題—「実践的指導力」を最大限伸長することのできる就業体験の仕組みの構築を目指して—」, 玉川大学教育学部紀要, 18, 2018, pp. 107-124
- 山本智子「教員をめざす学生が「介護等体験」から得るもの—「大学外の学び」が学生の視点を転換させ「感じとる力」を育てる—」, 近畿大学教職論叢, 29 (1), 2017, pp. 1-12
- 湯口雅史「反省的实践を内容にもつ教育実習の提案—「参加型教育実習」カリキュラムの可能性」, 鳴門教育大学研究紀要, 30, 2015, pp. 367-377
- 和田充紀・中林由利子「特別支援学校における介護等体験の内容と事前指導のあり方—体験学生および特別支援学校教師の意識調査から—」, 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要教育実践研究, 10, 2015, pp. 123-130
- F. コルトハーフェン編著・武田信子（監訳）『教師教育学—理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』, 学文社, 2012
- J. ロックラン著・武田信子（監訳）『J. ロックランに学ぶ教師教育とセルフスタディー教師を教育する人のために—』, 学文社, 2019